島唄——過去から未来へ歌い継ぐ

野村雅一　総合研究大学院大学教授比較文化学専攻／国立民族学博物館教授

世代間の関係を考える

2003年1月27日（月）、東京・赤坂のサントリーホールで、総合研究大学院大学が主催する研究公演「島唄——過去から未来へ歌い継ぐ——」が行われた。これは、総研大が社会と連係する方策を探るために、学長の裁量のもとで立ちあげたプロジェクト（注1）の一環である。

このプロジェクトでは、自然科学と人文科学のいずれも最先端を担う総研大の各分野の教育研究を、いかにして総合し、社会と共有していくかという今日的課題に取り組むために、いくつかのプログラムが進められている。そのひとつが、私たちが昨2002年秋から関西で定期的に開いている市民公開の研究会「世代間関係を考える会」（注2）で、今回の公演はその特別例会として東京で行ったものである。

公開研究会は、高度の専門性と総合性を旗印にする総研大が、場と機会を用意して、学術研究のすでにできあがった成果のみならず、そのプロセスを公開し、参加者たちの経験と知識をくむことで、研究そのものを活性化しようというちょっと欲張りな試みである。

そのような場で取りあげる研究課題はいくつも考えられるが、まずはじめに、今日多くの日本人が切実な関心をいだいている世代間関係をテーマを取りあげることにした。かつて存在した世代間の約束ごとは、今ではほぼ崩壊してしまい、世代間の分断、細分化、孤立化は進む一方である。この会では毎回、個別テーマを設定し、ゲストを招いて世代間関係の見直し方を論じ合っている。

元ちとせと奄美の島唄

ところで、2002年は日本列島に突如、奄美の島唄がきこえわたった年として音楽史に記憶されるだろう。

沖縄歌謡は、本土でもしばらく前からちょっとしたブームで、ポップスにも取りこまれていた。2000年には中江裕司監督のミュージカル映画『ナヴィの恋』が、沖縄音楽の第一人者、登川誠仁の存在を一躍、全国に知らしめた。その一方で、沖縄におとらぬ民謡の宝庫の奄美は、素通りされてきた感があった。しかし、2002年「ワダツミの木」を歌う元ちとせの声が文字通り耳目を驚かせ、奄美は一挙に本土の音楽ファンの注目を集めた。ピュアで力強い裏声、海水に足を浸すという歌詞、歌い手の一字姓……、それらすべてが新鮮で、人々の目を奄美に向かわせた。

元ちとせは、1996年に17歳で奄美民謡大賞を取っている。今回の総研大公演に出演してもらったベテランの築地俊造さんも、「あのときの彼女はすごかったですよ」と話していた。しかし、裏声やコブシを含めて、その歌唱法は決して彼女独特のものではなく、由来も知れぬ昔から奄美に伝えられてきている。実際、コンクールで優勝したとき彼女が歌ったのは、奄美大島の南端にひっそりと板壁の家が並ぶ、生まれ育った小集落、嘉徳に伝わる「嘉徳なべかな節」だった。この歌は、この村のノロ（神女）、「なべかな」の死を悼んで百年以上前から歌い継がれる哀歌である。島唄の「シマ」とは集落のことなのだが、これこそまさに島唄だろう。

今回の公演の下調べに行った私は、築地俊造さんに大島を車で案内してもらった。途中、「このあたりはミカンが多いですね」というと、築地さんは「ミカンとサワガニの唄があるんです」とひと節歌い出す。「鳥が鳴いていますね」というと、その鳥の唄があるといって歌ってくれる。というように、奄美では、自然や歴史、労働、人生の教訓、恋や別れなど、島の生活のあらゆる知識や想いが唄に歌われ、伝えられる。唄は島の文化そのものであり、民俗的知識のエンサイクロペディアなのだ。

世代から世代へ歌い継がれる島唄

今日、日本の本土では音楽にかぎらずあらゆる文化は点のような形で散在するばかりで、太い線として世代をつなぐことはますます困難になっている。この公演は、そんな状況認識から企画された。奄美大島から築地俊造とRIKKI（中野律紀）、それに八重山出身で沖縄を拠点に活躍する大工哲弘、という奄美、沖縄の島唄を現在リードする3世代の歌い手を迎えて、世代から世代へ、過去を未来へと

掛け合いで「朝花節」を歌う、向かって左からRIKKI、築地俊造、大工哲弘。

つなぐ島唄の根っこを、いっしょに考えてみようというのがねらいだった。島唄を知る人にとってはまことにぜいたくきわまる企画だったが、サントリーホールの協力や、奄美の島唄の人類学的研究で総研大・文化科学研究科の学位を取得した中原ゆかりさん（愛媛大学法文学部助教授）の尽力もあって実現することができた。

当日の東京は朝から雨模様で、夕方にはどしゃ降りになったが、予約申込者で会場はいっぱいになり、島唄への関心の高さを思い知らされた。

定刻すぎ、ホールは暗転し、スポットライトの下で大工哲弘さん（沖縄県無形文化財保持者）が歌う八重山を代表する名曲「トゥバラーマ」で公演がはじまった。つづいて、築地俊造さん（1979年日本民謡大賞）が「よいすら節」を歌った。「今日はきっと神様のお引き合わせで、みなさんとごいっしょに遊ぶことができるんでしょう」という意味の唄だとの解説。

観客も舞台にあがり、奄美の「六調」でフィナーレを迎えた。

それから、中原ゆかりさんと私が司会役に加わってそのままトークに入った。築地俊造さんとRIKKIさんは年が40歳もちがうが、数年前から2人で毎年いっしょに公演を行っている。これは今の東京のポピュラー音楽界では考えられないことではないか。どうしてそんなことが可能なのだろうか。

まずそのことを話題にすると、唄遊びという奄美の風習が背景にあると、中原ゆかりさんが話す。「なんとなく人が集まって、三線を弾く人がいたら唄遊びになる。酒を飲んでいる人もいるし、はじめは真剣に聴かない人もいるんですが、だんだん本気で歌うようになる。上手な人だけだとおもしろくないんですね。下手な人もいたり、破れた声の人もいたりする。年取った人が、こんな歌詞があるというと、若い人がそれのへんな真似をして笑いになったりして、楽しいものになっていく」

島唄のすぐれた歌い手を唄者（ウタシャ）とよぶが、築地さんによると、唄者になるかどうかは90%以上が4、5歳までにどれだけ唄を聴いて育ったかで決まるという。ほとんどの唄者が、親や祖父母などから唄を浴びるように聴いて大きくなっているそうだ。

ここでRIKKIさんが舞台に登場した。RIKKIは、奄美大島の南端の港町、古仁屋出身。1990年に史上最年少の15歳で日本民謡大賞に輝いたのち、東京のポップス界に進出。元ちとせが憧れた歌姫だ。RIKKIさんは「いつから唄を聴き出したのか、記憶もないんですよ」と話す。「車を運転しながらも自然と島唄を口ずさむ親がいたり、私がウトウトしながらでも、隣で父親が歌っていたりとか、子守歌のようにして聴いて育ったことがすごく大きいと思います。」

築地さんがさらに補足した。「唄遊びというのは、ヨチヨチ歩きの子どもから杖をついても歩けないような年寄りまで、いっしょになって歌ったり、聴いたり、飲んだりしているうちに、いつの間にか子どもでも簡単な歌をおぼえてしまう。島の人たちは子どもをあやすとき、手拍子を打ちながら、アドッコイ、ドッコイと踊らせるんです。すると不思議に、手をあげてこう動き出す。そのようにして、自分たちに共通のものを持って、誰もがそれを楽しんでいける。それで、年はちがっても、いっしょにやれるんではないでしょうか。」

大工哲弘さんは、八重山にも「ミチアシビ」という風習があると話してくれた。お盆の送り火に、大人たちの踊りに子どもたちも加わって、朝まで歌ったり踊ったりする。ただ、八重山のミチアシビは踊りが主で、おのずからリズミカルな曲になる。しかしいずれにせよ、「そんな環境があるから、次代へ唄が継承されていく土壌は確かにある」と感じている。大工哲弘がジャズやロックのミュージシャンと共演し、アフリカツアーまで敢行したのも、そのような土壌があればこそなのだろう。

トークのあと、歌がはじまると会場はいよいよ熱気につつまれた。奄美の唄遊びをなぞって、まず築地俊造とRIKKIの絶妙な掛け合いによる「朝花節」。ふたりは「マンコイ節」（築地）、「むちゃ加那節」「糸くり節」（RIKKI）などを交代で絶唱。そのあと大工哲弘が登場し、築地俊造と「朝花節」を別バージョンで歌ってみせた。それから先は、大工哲弘が八重山に伝わる奄美の歌「奄美小唄」を披露したりしながら、三線とトークで会場を魅了し、最後は奄美の六調「ワイド節」で観客がサントリーホールの舞台を乱舞し、終演した。

今回の研究公演は、アンケートでは非常に好評だったが、「総研大に期待すること」の項に、「このような催しを継続的に行ってほしい」とか「このような企画を通して、大学が社会に自然に入っていければいいと思う」などという意見が書かれていて、大学の社会連係のあり方を考えさせられる機会でもあった。

（注1）学長プロジェクト「最先端学術研究の社会との共有をめざす総合的研究——パブリック・アウトリーチとオーディエンス」小平桂一学長、高畑尚之副学長を顧問に、石森秀三（比較文化学専攻教授）を研究代表者として、いくつかの個別プロジェクトが推進されている。また、総括班では、共通プロジェクトとして、総研大の各研究分野を横断する「総合科学サイバー・ミュージアム」の準備作業が行われている。参加メンバーは登録制。詳細は、幹事の国立民族学博物館・吉田憲司研究室（yoshidak@idc.minpaku.ac.jp）にお問い合わせください。

（注2）京都市内でほぼ月1回、定員38人で開催している。この研究会にご関心がある方は、国立民族学博物館・野村研究室に直接ご連絡ください。
Tel:06-6878-8321